

Title	李賀「鬼仙」についての一考察：李白「天仙」との比較から
Author(s)	後藤, 友里
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2002, 36, p. 71-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47905
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

李賀「鬼仙」についての一考察

— 李白「天仙」との比較から —

後 藤 友 里

(一)

中唐の李賀（七九一—八一七、字は長吉）は、中国にあつて唯一「鬼才」と称された詩人である。その詩の特異性は、古来より多くの注釈家や研究者に注目されてきた。例えば、宋の嚴羽もその特異性に注目した一人であり、『滄浪詩話』（詩評）の中で、次のように評す。

人言太白仙才、長吉鬼才、不然。太白天仙之詞、長吉鬼仙之詞耳。

71 「太白」とは、「詩仙」とも呼ばれる李白（七〇一—七六二）のこと。嚴羽は李白の「仙才」に対比させる形で、李賀の「鬼才」をとらえている。この文について荒井健氏は、「嚴羽は、李白と李賀を天上的才能、冥界的才能と表現するだけではあきたらず、本物の天界の人、冥界の人が口を開いたのが彼らの詩だ、というのだろうか」と解釈さ

『滄浪詩話』は、李白を「天仙」と呼び、李賀を「鬼仙」と呼んでいる。「天」も「鬼」も共に人を超えた存在であるという点では共通するが、何故一方は「天仙」、一方は「鬼仙」とされ、あえて「天」と「鬼」とに区別されているのか。以下、李白の「天仙」と比較しながら、「鬼仙」と称される李賀の詩の特質をみていきたい。

(一)

『滄浪詩話』は李白と李賀を対比してその違いを述べているが、このような対比が行われるのは、両者にどこか共通するところがあるからでもあろう。李白と李賀の共通点は何か。彼らの詩はどちらも現世を離れた世界、つまり非現実的な世界を描いた点で共通すると考えられる。

両者の非現実的世界を描いた作品とはどのようなものか。まず最初に李白の詩をみてみよう。李白は「詩仙」「仙才」と称される通り、天界（仙界）に遊ぶというテーマを詠うことが多い。

青冥浩蕩不見底 日月照耀金銀臺

青冥浩蕩 底を見ず、日月照耀す金銀臺。

霓爲衣兮風爲馬 雲之君兮紛紛而來下

霓を衣と爲し 風を馬と爲し、雲の君紛紛として来たり下る。

虎鼓瑟兮鸞回車 仙之人兮列如麻

虎は瑟を鼓し 鸞は車を回らし、仙の人 列して麻のごとし。

(李白「夢遊天姥吟留別」卷十五)

この詩は、夢の中で遊んだ天上世界を叙述する。ここに挙げたのは、全四十五句のうち六句、天上から仙人が下っ

てきたところを描写した最も幻想的な場面である。

李白は、このように想像力を駆使してきらびやかな天界や仙界を描くことを好んだ。それは何故だろうか。一つには現実を超えた天界、仙界に遊ぶことによって、現実の憂いを乗り越えようとしたからだと考えられる。

古風 其十一 李白 (卷二)

黄河走東溟 白日落西海

黄河 東溟に走り、白日 西海に落つ。

逝川與流光 飄忽不相待

逝川と流光と、飄忽として相い待たず。

春容捨我去 秋髮已衰改

春容 我を捨てて去り、秋髮 已に衰改す。

人生非寒松 年貌豈長在

人生 寒松に非ず、年貌 豈に長えとこしに在らんや。

吾當乘雲螭 吸景駐光彩

吾當に雲螭に乗じ、景を吸い光彩を駐むべし。

ここには、李白の憂いが述べられている。人生は短く、青春は容赦なく過ぎ、人は必ず老いて死ぬ。このような限りある命への憂いは、中国では古来からずっと詠われてきた嘆きであるが、その憂いに李白はどのように対処したか。最後の二句に注目してみよう。「わたしは雲に登る竜の背中に乗って、日月の光を吸い取り、輝きをひきとめたい」と、昇仙して永遠の時間を手に入れたいと望む。現実の憂いから脱出しようとして、昇仙への願いが述べられている。つまり神仙世界で永遠の快樂を獲得することによって、現実の憂いをはらおうとするのだ。李白に求仙願望を述べる詩が多いのは、彼にとって神仙世界とは現実世界の憂いをはらってくれる憧れの世界だったからであろう。その憧れから李白の詩には夢幻的世界、非現実的世界が数多く描かれることになったのではないだろうか。

もちろん、李白の求仙願望は容易に成就されるようなものではなかった。

古風 其五 李白 (卷二)

太白何蒼蒼

星辰上森列

太白 何ぞ蒼蒼たる、星辰 上に森列す。

去天三百里

邈爾與世絕

天を去ること三百里、邈爾として世と絶つ。

中有綠髮翁

披雲臥松雪

中に綠髮の翁有り、雲を披りて松雪に臥す。

不笑亦不語

冥棲在巖穴

笑わず亦た語らず、冥棲して巖穴に在り。

我来逢真人

長跪問寶訣

我来つて真人に逢い、長跪して寶訣を問う。

粲然忽自哂

授以鍊藥說

粲然として忽ち自ら哂い、授くるに鍊藥の説を以てす。

銘骨傳其語

竦身已電滅

骨に銘じ其の語を傳うるに、身を竦めて已に電滅す。

仰望不可及

蒼然五情熱

仰ぎ望むも及ぶべからず、蒼然として五情熱す。

吾將營丹砂

永與世人別

吾將に丹砂を營み、永えに世人と別れんとす。

この詩は想像の中で太白山に登り、仙人に出逢えたことを詠う。だが、仙薬（不老長寿の薬）の作り方を教えてもらっている最中に、突然仙人は姿を消してしまう。結局、第十五句に「仰ぎ望むも及ぶべからず」とあるように、昇仙への願いは叶えられず、李白に深い絶望感をもたらす。第十六句の「五情」とは、喜・怒・哀・楽・怨の五つの感情、つまり感情のすみかである胸の中を指す。姿を消した仙人を追い求めても、もはや追いつかず、とめどもなく「五情」が熱くなり、もどかしい気持ちだけが残る。だが、それでもなお、最終聯に「今後仙薬を完成させて、

俗世間から永久に離れよう」という決意が述べられるように、李白はあくまでも仙界をめざそうとする。絶望が深ければ深いほど、よりいつそう李白の仙界への憧れは強くなるのである。

以上、李白の詩に詠われた非現実的世界についてみてきた。一方、李賀の詩に詠われる非現実的世界の場合はどうだろうか。節を改めて考えてみたい。

(三)

李賀の詩にも、天界（仙界）に遊ぶという夢幻的世界がテーマになることは少なくない。⁽³⁾だが、李白のように天界への憧れがストレートに詠われることはあまりなかった。それは何故だろうか。

王母桃花千徧紅　彭祖巫咸幾回死
王母の桃花　千徧　紅に、彭祖　巫咸　幾回か死せる。

(李賀「浩歌」卷一)

幾回天上葬神仙　漏聲相將無斷絶
幾回か天上に神仙を葬る、漏聲　相ひきい將ひきいて斷絶なし。

(李賀「官街鼓」卷四)

「浩歌」では、西王母の桃花は永遠の生命をもつが、彭祖や巫咸といった「仙人」は永遠の生命を持ち得ないと詠う。「官街鼓」においても、「天上」でも時は絶え間なく流れ、「神仙」さえ老い、やがて死んでいく、と詠う。「神仙」は人間の時間を超越しているが、必ずしも永遠の命を獲得して「憂い無き」世界に生きているわけではない。これが「神仙」に対する李賀の認識であった。このような認識の上に立つ李賀においては、李白のような憧れの対

象としての仙界はすでに成り立たなくなっていたのだろう。

李賀の詩において目立つのは、李白とは全く異質の、たとえば次の詩に詠われるような世界である。

南山田中行 李賀 (卷二)

秋野明

秋風白

秋野明るく、秋風白し。

塘水溲溲蟲嘖嘖

塘水溲溲りょうりょう蟲嘖嘖さくさく。

雲根苔蘚山上石 冷紅泣露嬌啼色

雲根の苔蘚 山上の石、冷紅 露に泣く嬌啼の色。

荒畦九月稻叉牙 蟄螢低飛隴逕斜

荒畦 九月 稻叉さが牙がたり、蟄螢低く飛び 隴逕ななめ斜ななめなり。

石脈水流泉滴沙 鬼燈如漆點松花

石脈 水流れ 泉 沙に滴る、鬼燈 漆の如く松花に點ず。

これは秋の南山（おそらくは李賀の故郷、昌谷の南の山）の夜の田野を詠った詩だが、ここに詠われる光景はきわめて異様である。結句の「鬼燈」は鬼火、すなわち埋葬された死体から出る燐が燃える炎のこと。「松花」は松の花。この詩では、松の木に灯る鬼火が松の花のように見える、というのであろう。あの世ともこの世ともつかぬ非現実的世界がここには描き出されているが、これはおよそ李白の詠う神仙世界とは遠くかけ離れた世界である。

李賀がこのような非現実的世界を詠うのは何故だろうか。李白が非現実的世界を詠うのは、現実の憂いをはらうとしたからである。「二十にして心已に朽ちたり」（贈陳商）卷三と述べる李賀も、現実世界の憂いや挫折と無関係ではなかった。

秋來 李賀 (卷一)

桐風驚心壯土苦 衰燈絡緯啼寒素

桐風 心を驚かせて壯土苦しむ、衰燈 絡緯 寒素に啼く。

誰看青簡一編書 不遣花蟲粉空蠹

誰か青簡一編の書を見て、花蟲をして 粉 空しく蠹むしばましめざる。

思牽今夜腸應直 雨冷香魂弔書客

思い牽きて 今夜 腸 應なほに直かるべし、雨冷やかに 香魂 書客を弔う。

秋墳鬼唱鮑家詩 恨血千年土中碧

秋墳 鬼は唱う 鮑家詩、恨血 千年 土中の碧。

桐の葉を吹く風に秋の訪れを感じて、驚き苦しむ心情が詠われる。消えそうなどもしびの中、キリギリスが李賀の貧乏ぐらしに同情するかのようには鳴く。そして次のような李賀の思いが述べられている。「一体誰がこの一冊の著作を愛読し、虫に食われて穴を開けさせずにおいてくれるのか。今夜のこの思い、腸も引つ張られるかのようだ。冷たい雨の中、古えの香り高い魂が現れて、筆をとる私を弔いに来た。秋の墓場、亡霊たちが唱う鮑照の詩。恨みの血は千年後のちまでも、土の中で碧玉となり残るだろう」と。

第四句までは詩をつくっても誰も読んでくれないことを悲嘆する。そして曲がりくねった腸がまっすぐになるほどの苦悩、つまり憂いが極限まで達した時、異世界から「香魂」が李賀のもとを訪れる。「香魂」とは、ここでは死者の靈魂の意で用いられている。第七句の「鮑家詩」は、南朝宋の詩人鮑照の「代蒿里行」や「代挽歌」などの挽歌を指す。第八句の「恨血千年土中碧」は、主君に殺された周の婁弘の故事を踏まえる。「莊子」外物篇に「婁弘蜀に死し、其の血藏さるること三年にして化して碧と爲る」という言葉がある。「莊子」の中では「三年」と述べられていたのを李賀は「千年」とし、恨みの長さを強調している。秋の墓場から幽鬼が鮑照の挽歌を唱い出し、

李賀を弔いに来る。恨みの血は千年たつても消えることはなく、土の中で凝り固まって碧玉となつて残るだろうと、激しい恨みが述べられて作品は締めくくられる。

この詩には、死者の国から「鬼」がこの世の李賀を弔いにくるのか、それとも李賀が死者の国へ行き、「鬼」の唱う挽歌を聞いているのか、どちらともつかぬ不思議な世界が描かれている。李賀の憂いが恨みともいふべきほどに極まった時、その想像力は非現実の異世界へと向かう。ここでの非現実的世界とは「鬼」の世界、すなわち恨みを抱いた怨霊達の住む世界である。

(四)

李賀の詩は、後に明の王思任が「喜びて鬼字、泣字、死字、血字を用う。」(『李賀詩解序』)と述べるように、「鬼」字を頻用する。「鬼」字には、死者の靈魂、万物の精靈、化け物など、さまざまな意味がある。そのうち死者の靈魂を意味する「鬼」は、祭られざる死者の靈魂を指して用いられることが多い。そして、その場合の「鬼」は「恨み」と切り離すことのできない関係にある。たとえば、『全唐詩』卷八六四―八六六には鬼がうたったとされる詩篇が収録されているが、それらの大半が恨みを述べた詩である。

叙幽冤 鄭瓊羅 (『全唐詩』卷八六五)

痛填心兮不能語 寸斷腸兮訴何処 痛は心を填ぎ 語る能はず、腸を寸断するも 何処にか訴えん。
 春生万物妾不生 更恨香魂不相遇 春は万物を生ずるも 妾は生じず、更に恨む香魂相遇わざるを。

これは鄭瓊羅という女の「鬼」の作とされるもの。貞元末、段文昌の従弟の某氏が派洲を旅行した。船に泊まった時、夢に鄭瓊羅と名乗る女の「鬼」が現れ、冤罪を訴えた。その後、某氏は異術に通じている義弟の樊元則の家に偶々立ち寄ることになった。樊元則は某氏が「鬼」に取憑かれているのを見抜き、それを祓つてやろうと申し出た。樊元則が除霊の術を施すと、どこからともなく女のすすり泣く声が聞こえてくる。そこで樊元則は紙を灯の中に入ると、紙一面に文字が浮かび上がってきた。それは「鬼」の恨みに満ちた内容の詩であった。右の詩はその中の四句を抜き出したものだとい⁽⁴⁾う。

李賀の詩が詠う「鬼」も祭られざる靈魂の場合が多く、したがって、「恨み」との結びつきも強い。

提出西方白帝驚 嗷嗷鬼母秋郊哭

西方に提出すれば 白帝驚き、嗷嗷として 鬼母 秋郊に哭く。

(李賀「春坊正字劍子歌」卷一)

これは劍を讀えた歌の一節である。「鬼母」とは、劉邦によって斬られた白蛇の故事にもとづく。ある日、天の白帝が白蛇に姿を変えて道を塞いでいた。そこに劉邦が通りかかり、その蛇を斬り殺した。数日後、ある人がその地を通りかかると、老母が泣いていた。詠を聞いてみたところ、老母は「赤帝の子(劉邦を指す)が我が子の白帝(白蛇)を斬り殺した」と言⁽⁵⁾ったという。李賀は、この老母を詩の中で詠うに際して、あえて「鬼」字を用いて「鬼母」と呼んだ。老母は、自分の息子を劉邦に斬られたことを恨みに思っている。李賀は「鬼」字を使うことによって、その「恨み」を強調したと考えられる。

それまでの中国の詩においては、「鬼」が恨みを抱いた祭られざる靈魂の意味で使われることは少なかった。と

ころが、李賀の詩に詠われる「鬼」には、死者の靈魂の抱く「恨み」の心情が色濃く刻まれている。この点に李賀の詩の特質がある。同様のことは次の詩についても言える。

金家香術千輪鳴

金家の香術千輪鳴り、

揚雄秋室無俗聲

揚雄の秋室俗聲無し。

願攜漢戟招書鬼

願わくは漢戟を攜えて書鬼を招き、

休令恨骨填蒿里

恨骨をして蒿里に填めしむるをやめよ。

(李賀「綠章封事」卷一)

これは道士の夜醮(道教で行う除災招福の夜祭)を描いた詩の一節である。ここには道士に祈願を依頼した李賀自身の願いが述べられている。「書鬼」とは書生の靈であり、具体的には、不遇な士大夫の代表的人物である前漢の揚雄の靈。生涯不遇のままに恨みを抱いて死んでいった揚雄の骨を、墓の中で埋もれたままにさせないようにしてもらいたい、と李賀は言う。「恨骨」とは、ただ単に揚雄だけでなく、不遇のまま死んでいった士大夫すべてを指すものであり、そこには李賀自身も含まれていよう。現世において不遇の者は死後、恨み深い「鬼」となるが、「恨骨」とはそれを指したものにほかならない。次の詩にもそうした「鬼」が詠われている。

蘇小小墓 李賀 (卷一)

幽蘭露 如啼眼

幽蘭の露、啼眼の如し。

無物結同心 煙花不堪剪

物として同心を結ぶ無く、煙花は剪るに堪えず。

草如茵 松如蓋

草は茵の如く、松は蓋の如し

風爲裳 水爲珮

風は裳と爲り、水は珮と爲る。

油壁車 夕相待

油壁車、夕べに相い待つ。

冷翠燭 勞光彩

冷やかなる翠燭、光彩を勞す。

西陵下 風吹雨

西陵の下、風 雨を吹く。

「蘇小小」とは南齊時代の有名な妓女。この詩は、来るはずのない恋人を永遠に待つている妓女の思いを詠っている。これは一種の閨怨詩とも言える。だが、ここに詠われる蘇小小は死霊である。彼女は鬼火（「翠燭」とあるのは鬼火であろう）を灯しながら、死後もひたすら恋人を待ち続ける。恋人が訪れてくれない恨みは、「鬼」の世界の住人となっても晴らされることはない。ここでも「鬼」は、恨みの心情と密接に結びついている。もう一首、李賀の代表作といふべき次の詩を詠んでみよう。

感諷 其三 李賀（卷二）

南山何其悲 鬼雨灑空草

南山 何ぞ其れ悲しき、鬼雨 空草に灑ぐ。

長安夜半秋 風前幾人老

長安 夜半の秋、風前 幾人か老ゆ。

低迷黃昏徑 衰喪青櫟道

低迷す 黃昏の徑、衰喪たり 青櫟の道。

月午樹立影 一山唯白曉

月午にして 樹 影を立て、一山 唯だ白曉。

漆炬迎新人

幽壙螢擾擾

漆炬 新人を迎え、幽壙 螢 擾擾たり。

第一聯。「南山」は長安の南方に位置する終南山のことで、その悠然たる景觀は永遠の生命に喩えられる。「鬼雨」は李賀の造語で、幽霊の降らす雨、物の怪めいた雨という意。「空草」とは人氣ひとけのない草むらとも取れるが、草むらそのものが無いのかもしれない。「鬼雨」が幻影の草むらに降りそそぐ光景を詠っている。第二聯。長安の秋の夜。冷たい風の中、幾人もの人が年老いてこの世を去っていくと詠う。人間の限りある命が永遠の生命の象徴である。「南山」と対照されることによって、よりいっそう強調されている。第三聯。「低迷（はつきりとしない）」する黄昏の小道、ゆらゆら揺れる青いクヌギの道。黄昏の道は本当にあるのか。クヌギの枝が揺れているのか、それとも道そのものが揺れているのか。ほとんど幻と言っていいような風景が詠われる。第四聯。「月午」は、月が中天に昇る真夜中のこと。唐の戴孚の『廣異記』に「世間の月午は地下の齋時」（『太平廣記』卷三七二に引く）とあるように、地下の「鬼」の世界では祭りが行われる特別な時間帯である。月が中天にかかって、樹影がまっすぐに立つ。そして山全体は暁のように白い。「鬼雨」が本当に降っているなら月が出るはずはない。月が出たとしても、山が暁のように白くなるほどの明るい月光ではあり得ないだろう。やはり幻ともいうべき不確かな世界が詠われる。そして末尾の第五聯。「漆炬」は鬼灯、鬼火のこと。「新人」は新鬼、すなわち新たに「鬼」となった死者のこと。長安で命の灯火を消した人々は、幻影の道を通り、幻影の山を越え、やがて墓場へとたどり着く。そして、鬼火が漆のような灯火となって新しい死者達を迎え、奥深い墓穴には螢が乱れ飛ぶ。漆とは黒いものである。漆のような真黒な灯火とは現実には存在せず、したがってここに詠われる「漆炬」もまた一種の幻といえよう。

この詩には李賀の詩の特異性が最もよく表れていると思われるが、ここに描かれた「空草」「徑」「道」「月」「漆炬」「螢」はすべて実在さえあやふやな幻影として描かれている。そして、その幻影の光景の描写を通して有限の

命をめぐる憂い、恨みの感情が表現されるのである。

以上、李賀の詩に詠われる非現実的世界についてみてきた。李賀の詩を特徴づける非現実的世界とは、すなわち「鬼」の世界であった。そして、それは憂いや恨みの心情と密接に結びついている。現実世界における憂い、恨みの心情を象徴的に体现するもの、それが李賀にとっての「鬼」であったのではないだろうか。

(五)

李白「天仙」と李賀「鬼仙」とはどのように異なるのであろうか。李白は、神仙世界への憧れを詠うことで、現実の憂いを解消しようとした。それに対して、李賀の場合は妖しげな「鬼」の世界を描くことで、晴らされることのない恨みの心情を強調していくのである。「天」と「鬼」は、全く逆の方向性を持つものである。陽に属する「天」は上方に、つまりプラスの方向にあるが、陰に属する「鬼」は、下方に、つまりマイナスの方向にある。李白が天界、仙界に目を向け、上へ上へとプラス志向の非現実的世界を描くのに対して、李賀は「鬼」の世界に目を向け、下へ下へとマイナス志向の非現実的世界を描いていく。同じように現実を離れた世界を描いていても、その方向性は、全く異なる。その違いを捉えて嚴羽は、「人言太白仙才、長吉鬼才、不然。太白天仙之詞、長吉鬼仙之詞耳。」といったのではなからうか。

註

(1) 荒井健・興膳宏共著『文学論集』（朝日新聞社、一九七二年刊）三五八ページ。

- (2) 本稿に挙げる李白の詩は、王琦注『李太白全集』（中華書局、一九七七年刊）による。
- (3) 例えば「夢天」（卷一）や「天上謠」（卷一）など。なお本稿に挙げる李賀の詩は、『三家評注李長吉歌詩』（上海古籍出版社、一九九八年刊）に収録される『李長吉歌詩王琦彙解』による。
- (4) この話は『太平廣記』卷三四一に引く『西陽雜俎』にみえる。
- (5) この話は『史記』卷八、高祖本紀にみえる。

（大学院後期課程学生）

李賀“鬼仙”考——在与李白的“天仙”比較上——

後藤 友里

《滄浪詩話》把李白稱為“天仙”、把李賀稱為“鬼仙”。“天”与“鬼”雖然都是超出人間世界的存在，但是為甚麼用“天”与“鬼”来區別他們呢。本稿中，在与李白“天仙”作比較的基礎上，来分析被稱為“鬼仙”的李賀的作品特徵，可以得出以下結論。

李白想通過对神仙世界的憧憬来解除对現實的憂慮。与此不同，李賀是通過对“鬼”的世界的描写来強調他的怨恨的心情。李白是把目光注向仙界，对非現實的世界採用積極的的筆法，而李賀把目光注向“鬼”的世界，对非現實的世界採用消極的筆法。他們雖然同樣是描写非現實的世界，但是方向性却截然不同。因此《滄浪詩話》用“天仙”和“鬼仙”来區別他們的不同。

キーワード：李賀 鬼仙 李白 天仙 鬼才